No. 35 2000 年 8 月 31 日発行

SITA 情報理論とその応用学会ニューズレター

会長あいさつ.....韓　太舜（電気通信大学）
川上先生と喜安先生–第９回情報理論とその応用シンポジウム雑記.....丸林　元（創価大学）
SITA2000 開催準備状況 .....実行委員長 今村恭己（九州工業大学）
ISITA2000 準備状況 .....実行委員長 岡本栄司（ウィスコンシン大/東邦大）
IEEE ISIT2000 報告 .....吉川　英機（鈴鹿工業高等専門学校）
特集号論文募集のお知らせ
国際会議のお知らせ
博士論文要旨の掲載　募集のお知らせ
会員の声　原稿募集のお知らせ
SITA ニューズレターの配布方法について

会長あいさつ

韓　太舜（電気通信大学）

「情報理論とその応用学会」(SITA) は，その前身である「情報理論とその応用研究会」から数えれば，すでに 20 有余年を超えて，ますます隆盛発展の勢いを増しつつある．しかし，この「学会」はまことに「不思議な学会」である．研究例会をもたず，編集会議をもたず，ジャーナルも持たず，長老というものも持たず，全員これ若手，学会費もたったの 3000 円で．ただ 1 つ本気でやっていることと言えば，年 1 回の温泉地における泊まり掛けのシンポジウムだけである．これだけ取ってみても，いわゆる日本的常識から言えば，およそ「学会」などと僭称するのは言語道断，不埒の極みということになるであろうが，その不埒な「学会」が年を経る毎に発展しているのだから,「不思議」なのである．

「情報理論とその応用学会」は，そもそも，その成立の経緯からして,「学会的」ではなかった．関西では，有本卓先生，笠原正雄先生，平沢茂一先生，関東では，宮川洋先生，今井秀樹先生，原島博先生，それと小生，などが発起人となり，日本の電子情報通信学会（当時は，電子通信学会）ではずっと情報理論の研究会が消滅したままになっているので，情報理論の研究同好会のようなものを別途でっちあげるのも面白いのではないか，ということで大いに意気投合した結果,「情報理論とその応用研究会」が 1978 年に誕生することになったのである．

当時の小生の気持ちを振り返ってみると,「情報理論の研究は面白いからやる」,「それが何かの役に立とうと立たなかろうと，小生の関知するところではない」というような随分手前勝手なものであった．ただ，本当に不真面目な気持ちだけでそういう成り行きになったのかと言えば，そうでもない．諸先生方の名誉のために付け加えれば，その前年に米国 Cornell 大学で開かれた IEEE International Symposium on Information Theory (ISIT) に数少ない日本勢として果敢に参加された有本卓先生や笠原正雄先生などが，このままでは日本は世界の大勢から取り残されてしまう，という危機感を持たれたこともその直接的契機の 1 つであった．それに，当時は，電子通信学会に対して，世界の大勢に遅れないためにも「情報理論研究会」を新たに設けよ，と言っても全く相手にされないという事情もあった．それが今では，ISIT と言えば，日本からの参加者が 50 名程にも達するのが当たり前になっているのだから，まったく今昔の感を禁じ得ない．

「第 1 回情報理論とその応用研究会」は神戸の六甲荘で開かれた．参加者は総勢 80 名程度であったが,「その昔情報理論をやっていたことがあるので，懐かしくて参加した」という長老や大家が大半で，研究発表は 30 件程度に過ぎなかった．しかし，風呂に入り飯を済ませたあとは,「ワークショップ」と称して，アルコール分を十分に摂取しながら，古き良き情報理論時代の回顧やこれからの研究動向と課題などを巡って談論風発．正論，極論，激論の飛び交う中での学問的・人間的交流は誠に味わい深く，大いに意気あがり，参加者全員が古くからの知己のように親しくなってしまった．小生にとっても，このような場で得た知己が今では最も親しく最も大切な研究者仲間になっている．これは掛け替えのない生涯の財産である．

さて,「情報理論とその応用研究会」はその後，高度情報化時代の到来という時代的背景の中で，追い風を受けながら順調に発展し，参加者も大いに増え情報理論の若手研究者がこの研究会の中から輩出するようになった．そこで持ち上がったのが,「研究会」の「学会化」の問題である．我々の研究会は発足時こそ「よれよれ」であったが，所帯もこれだけ大きくなりその基盤も盤石なものとなった今では，当然のことながら「学会化」を計って今後のさらなる発展に備えるべきであるという論者もいれば，我々の研究会の良さは「何物にも捕らわれない自由な徹底的議論」すなわち「同好会的雰囲気」にあるので，そのような自由闊

達な気風が形骸化する恐れのある「学会化」には反対であるという論者もいた．この問題は研究会発足以来の最重要課題として，理事会などを中心に徹底的に議論されたが，結局,「学会化」はするけれども「同好会的伝統」は最大限に尊重・固守する，したがって，雑用の大量生産をもたらし所謂「権威主義」を招来し兼ねない「学会誌（ジャーナル）」は発行しない，ただし，研究上の議論を行い会員間の相互交流を計るための「ニューズレター」は発行する，ということで決着をみた．

今になって振り返って見れば，この決定は「最善」であったように思われる．というのは，その後も「同好会的伝統」はますますしっかりと根を張り続け，若手研究者の大量参加をもたらし，年１回の情報理論とその応用シンポジウムでは，厳しく真剣な雰囲気が会場を支配しており，さらには，夕食後のワークショップでは，昼とは打って変わって，完全にリラックスした中でも非常に集中したホットな話題の提供と火花の散るような激しい議論が深更まで及ぶ，といった光景が見られるからである．

小生は若いときから「学会嫌い」で，電子情報通信学会などの「正式な学会」で発表した試しは，これまで一度もない．しかし,「情報理論とその応用学会」だけは例外で，小生はこの「学会」が大好きである．海外出張などのやむを得ない場合を除けば,「皆勤賞」ものである.「同好会的雰囲気」が気に入っているのか,「温泉地」が気に入っているのか定かでないが，多分その両方なのであろう．とにかく,「情報理論とその応用学会」が大好きなのである．そう言えば,「日本大好き人間」のドイツ・エッセン大学の Han Vinck 教授も，情報理論とその応用シンポジウムの雰囲気が大変気に入っていて，毎年その頃になると日本にやって来る．彼によれば，これ程の規模の情報理論コミュニティをこれだけ活発に長期にわたって維持しているのは，世界的にも珍しいとのことである．

今回，そのように大好きで大事な学会の会長に選ばれる栄誉に浴したのだから，さぞかし嬉しい筈であろうと思われるかも知れないが，そうでもないから困るのである．祖父が「責任のある役職には就くな．お前はその器でない」と遺言した禁をついに破る羽目になったのには色々な経緯があるが，とにかく当惑しているのである．今まで「無責任に勝手なことの言い放題」で済んで来たのは，考えてみれば，見識ある諸先生方の包容力に甘えてのことであった．それが,「会長」となっては，甘えようにも甘える相手が居ないではないか．

しかし，いくら愚痴を言ってみても「覆水盆に返らず」であり，見苦しいだけである．誰も同情はしてくれない．ここは一つ，祖父の遺言を乗り越える努力をしてみよう．全力でベストを尽くして任を全うして行けば，祖父さえも見抜けなかった「潜在的能力」が顕在化して来ないとも限らないではないか．その結果，今までに遭遇したことのない全く未知の素晴らしい新世界が開けて来るかも知れない．それに，大好きな学会のための大切な「ご奉公」ではないか．ここは一つ,「男らしく」，黙して語らず，無言（不？）実行と行こう．そして，2 年間という任期を無心になって「この夢」に賭けてみよう．そうすれば，会員諸賢もご協力とご支援を惜しむことなく，小生を支え続けてくれるであろう．と，ここまで書いて来たら，突然「やる気」が出て来たから「不思議」である.「不思議な学会」を一層発展させるために，会員の皆様，よろしくお願い申し上げます．

川上先生と喜安先生　―　第９回情報理論とその応用シンポジウム雑記

丸林　元（創価大学）

第８回情報理論とその応用シンポジウムのあとを継いで、第９回シンポジウムを新潟で持って欲しいという話があり、大変なことになってしまったと思ったがお引き受けして、昭和 61 年 10 月 29、30、31 日の 3 日間妙高のホテル太閤で開催した．SITA という略称を使ったのはこのシンポジウムからである．

会場を探すのもひと苦労であったが、特別講演をどなたにお願いするかというのも、実行委員長としての私の悩みのひとつであった．それについては、自分の尊敬する人をと思い、川上正光先生（故人）と喜安善市先生（NTT 通研の先輩なので以下喜安さんと呼ばさせて頂く）に直々にお願いしたところ、お二人とも心よくお引受け下さったのでほっとしたが、なかなか気を使う大変な仕事であった．特別講演の講師としては別に甘利俊一先生にもお願いした．

妙高高原駅まで川上先生をお迎えにいったときの話である．当時川上先生は私が勤務する長岡技術科学大学の学長であったが、私とは最初から非常に波長が合った．妙高高原駅からホテルまでの車中で、喜安さんにも講演をお願いしていることをお話ししたところ、”君も喜安君に汚染されたほうか”と云われるので”私は通研の入社試験のとき喜安さんに高次代数方程式の解き方について質問され油を絞られた覚えがありますが、入ってからは課が違いましたので直接のご薫陶は受けてません”とお答えしたところ、”それは良かった”と云われ、私が喜安門下生でないのを知って安心されたのか、喜安さんのエピソードをいくつかユーモアを交えながら紹介された．

喜安さんは旧制松山高校時代から物凄い勉強家として有名であったことから始まり、理系人間には代数型（左脳型）と幾何型（右脳型）とがあるが喜安さんは代数型の典型であることなどいろいろとお話されたが、特に面白かったのは次の話である．”喜安さんは野菜を食べないんだよ．それでよくビタミンCが不足しないものだと不思議に思うかもしれないが、果物は食べるらしい．それでいつか誰かがトマトのような野菜か果物か判別し難いものは喜安君に食べさせたらいい、彼が食ったら果物に違いないといって大笑いしたんだよ”という話である．

ところで、この話をされた川上先生は肉を召し上がらないので有名であった．私はしばしばご一緒に会食する機会があったにも拘わらず、このことを殆ど忘れていた．日本海の魚ばかり賞味していたからであろう．シンポジウムの最終日、全部の行事が終りホテル太閤の食堂で川上先生と喜安さんを前にして昼食をとった時のことである、シンポジウムの定食として親子どんぶりが出てきた．川上先生はじっとどんぶりをみつめておられたがややあって、” 私はこれは駄目なのだよ”とおっしゃった．私は”しまった”と思い慌ててマネジャーを呼び、なにか寿司でもとれないか先生は肉類は駄目なんだよと云ったところ、マネジャーは今日は土曜日ですし屋は休みですという．とにかくなんとかして呉れないかと頼んだら、卵どんぶりならすぐできますがどうでしょうかと云うので川上先生のご了解を得てやっと急場を凌いだ．片や肉は駄目、片や野菜は駄目、という明治末から大正初期生れの老大家をお招きして冷汗をかいた話である．以上はシンポジウムのエピソードで、私が情報理論とその応用学会会員の皆さんにお伝えしておきたい話はこれからである．

喜安さんは初日からお見えになり、ホテルに着くや否や各セッションの発表を勢力的に見て廻られたようである．その感想であるが、私が”いかがでしたか”と伺うと喜安さんは” 皆非常に難しそうなことをやっているが、よくよく聞いていると、これによって 0.5dB 改善できるとか 1dB 改善できるとかいう話ばかりで失望した．われわれが通研に入った頃は、これで 2 倍に改善できますというようなことを云ったら上司から叱られたものだ．1 桁 2 桁の改善でなければ問題にならんと一蹴されたものだ ”と云われた．これは NTT の電気通信研究所に在籍していた者として同感するところである．”無から有を生むのが研究である”とハッパをかけられた所長もいる．最初から狙いが低ければ大きな成果は期待出来ない．どうか本学会会員の方々常に大きな狙いを持って未来に挑戦して頂きたいと思うものである．

SITA2000 開催準備状況

実行委員長 今村恭己（九州工業大学）

SITA2000 の開催日（10 月 10 日 (火)-13 日 (金)）も近付いたので、実行委員会からその準備状況を簡単にご報告したい。

私 (今村) が SITA2000 の実行委員長の大役をお引き受けしたのは、昨年の SITA99（11 月 30 日—12 月 3 日、越後湯沢）の開催間近に、私に SITA2000 の九州開催の打診があったからである。したがって最初の仕事は、開催地と会場探しであった。阿蘇と九重とで 3 日間会場探しをした結果、九重に若干の未練はあるが交通の利便性に配慮して、グリーンピア南阿蘇を会場にすることを昨年の 12 月 10 日に決めた。この会場探しには、上原君 (北九州大)、戒田君 (八代高専)、楊先生 (九工大)、入江先生 (八代高専) と荒木君 (九工大) が協力してくれた。阿蘇 5 岳の雄大な眺めと緑豊かな広々とした田園地帯とを楽しめる会場で、SITA 参加者が実り多い交流のための時間を持てることと期待している。なお遠方からの参加者に阿蘇だけでなく九重も楽しんで頂きたいので、最終日の 10 月 13 日 (金) には会場から阿蘇山頂・九重高原・九重の地熱発電所 (九州電力) 経由で熊本空港・JR 熊本駅行きのチャーターバスの運行を企画しているので、ご利用下さい (湯布院・別府方面に行く人は、九重で下車可能)。

大濱先生 (九大) がプログラム委員長を快諾して下さったので、SITA99 の実行委員経験者の兼田先生 (佐世保高専) 以外は、楊・松藤君 (佐賀大)・上原・戒田・荒木・宮崎君 (九工大) と私の親しい人に実行委員をお願いした。業務分担については、私の研究室が登録・予稿集作成・会場運営等の人手の要する業務を担当し、大濱先生にはプログラム作成・特別講演の企画・外国からの参加者への対応等をお願いした。

登録・論文原稿受理等の業務を私と荒木君の 2 人で処理するために、SITA98 で内匠先生 (名工大) の研究室で作成し、SITA99 で活躍したホームページからのインターネットによる登録システムを活用することにした。SITA99 の実行委員長の荻原先生 (長岡技大) と総務の中川先生 (長岡技大) は、登録システムだけでなく SITA99 実行委員会の多くの資料を提供して下さった。SITA2000 のホームページと登録システムの作成と運用は、荒木君の全面的な協力で順調に進んでいる。荒木君の貢献は極めて大きい。

開催時期は、11 月の ISITA(ハワイ) と 12 月の ASIACRYPT(京都) とを避けて、例年よりも早目の 10 月開催にした。したがって発表申込と論文原稿提出の締切も前倒しになり、それぞれ、8 月 4 日と 9 月 4 日に決めた。開催計画の SITA 理事会（2 月 19 日）での承認の後、開催案内を電子情報通信学会誌 (5 月号) と IEEE IT Society の News Letter(6 月号) への掲載依頼をすると共に SITA のメイリングリストによる開催案内 (5 月末) を行った。また電気通信普及財団への助成の申請も例年通りに 5 月に行った (結果の通知はは 9 月)。実行委員会へ学会から 240 万円の運営補助と 100 万円の学生補助等のあることが昨年 12 月の理事会で分かり、寄付金集めや参加費の値上げ等をせずに運営するための予算案の作成の見通しが立ち、一番心配なことが解決して安心した。これらの実行委員会への補助は毎年 SITA の総会では会計報告として会員全員に報告されているので、私も知っていて当然であるが、私は実行委員長を引き受けて初めて関心を持って分かった。私と同じ程度の関心しか持っていない会員が多いと思う。会場が厚生省関係の施設であるので会場費が低目であることと、予稿集の印刷費は別刷も含めて 2 冊で 5,000 円以下の見積になったので、参加費を例年よりも若干低めに設定し、別刷は講演者に無料で配布することにした。学会運営は、参

加者の自由な相互交流を尊重し、出来るだけ簡単にしたいと考えている。

発表申込の 8 月 4 日は目前であるが、最終的に発表申込件数が幾らになるかは未だ分からない。会場は、昨年同様に、5 会場並列使用を予定しており、200 件前後の発表を消化できる予定である。今回は、準備期間が短いのと競合する国際学会の開催とを考慮して、発表件数は低目 (200 件以下) で構わないと考えている。8 月中旬には SITA2000 のホームページに、論文原稿の形式・参加費の支払・宿泊申込等の案内と共に、アドバンスプログラムも掲載する予定である。

特別講演は今回は 1 件で、6 月にイタリアで開催された IEEE ISIT2000 での Shannon Lecturer である嵩先生 (広島市大) にお願いしている。7 月 24 日の理事会で学会のロゴマークが決った (500 近くの応募作品から大賞作品 1 点が選ばれた)。今回の予稿集の表紙には、このロゴマークを使用する予定である。

会場選択・チャーターバス運行等、実行委員長の判断で決めたことは多いが、メールで提案とその理由とを実行委員全員に報告し、検討してもらうスタイルで進めている。実行委員全員 (9 名) が集まっての実行委員会は、8 月 7 日に初めて会場のグリーンピア南阿蘇で開催する。8 月 4 日の発表申込締切の後なので、実行委員全員で会場を見て、会場側との詰めの打合せを行う予定である。

今回の SITA2000 は、短い準備期間だけでなく実行委員長の経験不足により、細かな点では問題もあるかと危惧している。しかし会場の自然環境は (好天気に恵まれれば) 申し分ないと思うので、参加者各位が目的を持って参加し、多くの成果を持ち帰ることを願っている。10 月に南阿蘇でお会いするのを、実行委員全員が楽しみにしています。

ISITA2000 準備状況

2000 年 11 月 5 日〜8 日 Sheraton Waikiki Hotel、Hawaii

実行委員長 岡本栄司（ウィスコンシン大/東邦大）

今年は、ISITA が最初にハワイで開催されてから 10 周年記念になります。この間、シンガポール、オーストラリア、カナダ、メキシコで開催され、今年再びハワイのシェラトン・ワイキキ・ホテルに戻ってきました。振り返りますと、この 10 年間における情報科学・技術の進歩には目を見張るものがあります。前回参加した人には、この機会に、このめまぐるしく変わった 10 年間を振り返ってみるのもいいでしょう。古い人にとっても新しい人にとっても、ISAITA@Hawaii は次の 21 世紀に向けて新たに情報理論とその応用の研究の再スタートを切るいい機会ですので、是非多くの方々が参加することを希望します。

この記念すべき年に、ISITA2000 は ISPACS2000(IEEE International Symposium on Intelligent Signal Processing and Communication Systems) と共催で開催されます。このため、多くの参加者が予想されており、現に投稿論文数は ISITA2000、ISPACS2000 各々300 件近くの投稿がありました。おそらく、活気溢れるシンポジウムとなることでしょう。

今年は招待講演に W. Wesley Peterson、Jacob Ziv、山田 宰という豪華な顔ぶれを揃えました。かならずや、今後の研究の刺激になるような話を聞かせていただけるものと思います。ISITA の詳細については Web Page をご覧ください。

http://isita2000.soft.iwate-pu.ac.jp

ISITA2000 実行委員会

International Advisory Committee Chair:
Hideki Imai (Univ. of Tokyo)

Symposium Co-Chair:
Shu Lin (Univ. of Hawaii at Manoa)
Eiji Okamoto (Univ. of Wisconsin /Toho Univ.)

Program Co-Chair:
Toru Fujiwara (Osaka Univ.)
Marc Fossorier (Univ. of Hawaii at Manoa)

Treasurer:
Kaoru Arakawa (Meiji Univ.)

Local Arrangement:
Marc Fossorier (Univ. of Hawaii at Manoa)

Publicity:
Toyoo Takata (Iwate Prefectural Univ.)

Registration:
Kazuhiko Yamaguchi (Univ. of Electro-Comm.)

Secretary:
Atsuko Miyaji (JAIST)
Kanta Matsuura (Univ. of Tokyo)

IEEE ISIT2000 報告

吉川　英機　（鈴鹿工業高等専門学校）

2000 IEEE International Symposium on Information Theory (ISIT2000) が、イタリアのソレントにおいて 6 月 25 日から 30 日の日程で開催されました。南イタリアのリゾート地として名高いこの街は、「帰れソレント」のカンツォーネで世界的に知られています。ちょうどこの時期は海水浴の観光客が多く、丘の上から眺めた紺碧の海のビーチには人が溢れており、澄んだ海に惹かれて私も泳ぎたい気分になりました。南イタリアは東海地方よりもずっと高緯度の場所にあるのですが、非常に日差しが強く日焼けするほど暑かったので、せっかく持っていった上着も着ることはありませんでした。実際に、会場でも半ズボンにTシャツなどのリラックスした服装が多く、リゾート地でのシンポジウムだということを実感しました。

ISIT は、IEEE Information Theory Society が主催する情報理論の分野では最大規模のシンポジウムです。今回の ISIT2000 では、約 500 件の一般講演が 7 パラレルセッションで行われました。ここでは、符号、暗号、通信など多様な発表が行われました。特に、私が参加した Iterative decoding, Low density parity check code などターボ符号に関連するセッションでは聴衆も多く大変盛況となり、この分野における研究が世界的にも活発であることを感じ取ることができました。

また、SITA と同様に一般講演の前に特別講演があります。特別講演では、Panel discussion, Shannon lecture, Plenary talk があり、Panel discussion では"The next fifty years of information theory and beyond"というタイトルで討議が行われていました。Shannon lecture は Shannon award 受賞者によって行われるのが慣例だそうです。今回は 2 件の講演があり、講演者と題目はそれぞれ、Prof. Tadao Kasami: "Recursive soft decision decoding algorithms for binary linear block codes、および、Prof. Thomas Kailath: "Adaptive filtering, displacement structure and fast modems"です。Plenary talk も 2 件あり、講演者と題目はそれぞれ、Prof. Peter Shor: "Quantum Shannon theory"、および、Prof. Sanjoy Mitter: "Control with information constraints: information theory meets system theory"です。

幸い、期間中は天候にも恵まれました。毎日昼食は野外でワインを嗜みながら 1 時間半ぐらいかけてゆっくり取るといった、日本とは全く異なる習慣に最初は戸惑いもありましたが、2 日目以降はこのようなひとときを満喫していました。

28 日の午後には、ポンペイへの Excursion がありました。ポンペイには 2000 年以上も前に栄え、ヴェスヴィオ火山の噴火によって埋もれてしまった町の遺跡があります。長年火山灰に埋もれていたために保存状態が非常に良く、2000 年以上前の生活を鮮明に伝えているようでした。この遺跡は広大なうえに日陰があまりなく、照りつける太陽の下で石畳の廃墟を歩き回ったので疲れましたが、古代ローマ時代の遺跡に触れることができ、有意義な一時となりました。

29 日には晩餐会がナポリの中心から少し離れた海辺にある鉄道博物館で行われました。会場には機械油の匂いが漂い、機関車が取り囲む空間にテーブルがぎっしりと並べられており、これまでの晩餐会のイメージからは想像もできないような場所でしたが，非常に貴重な体験となりました。このような場所で晩餐会とは、まさに、イタリア人の発想の奇抜さを感じました。この席で、Award Ceremony があり、Shannon Award を嵩教授（広島市立大）が授賞されました。また、Paper Award の授賞、さらに、IEEE IT Newsletter (Vol.50 no.2) でアナウンスされました IEEE Third-Millennium Medals の授賞も行われました。

これまで 3 年間に 2 回行われていた ISIT は、今後は毎年開催されることになります。次回の ISIT2001 は、アメリカ合衆国のワシントン D.C. において、来年の 6 月 24 日から 29 日の日程で開催されます。また、最終日のパーティにおいて、2002 年はスイスのローザンヌ、2003 年は横浜で開催される予定であることがアナウンスされました。

今回、国際シンポジウム参加は結構体力が必要だということをあらためて実感しました。実は、出発 2 日前に学位論文を提出するという強行日程でしたので、現地では少し疲れておりました。次回からは体調を整えて参加するつもりでおります。

Get together party が行われたプールサイドにて撮影

ユニバーサル符号とデータ圧縮小特集号 論文募集

電子情報通信学会 論文誌 A， 2001 年 6 月号 発行予定

ユニバーサル符号とデータ圧縮小特集編集委員会

情報源符号化の技法は，通信や計算機システムのインフラが充実，発展する中で，ますます重要になってきています．1970 年代後半から 1980 年代にかけて， 歪みのないデータ圧縮用符号として Ziv-Lempel 符号や MDL (minimum description length) 基準による符号などが提案されると， それらの著しい成果によって，単一の情報源には依存しないユニバーサル符号が 多くの注目を集めるようになりました．これらのユニバーサル符号は， 現在，実用的データ圧縮アルゴリズムとしてはもちろんのこと， モデル選択問題など様々な分野で応用され， 情報理論的な基礎研究から，様々な分野での応用研究まで 幅広く活発に研究されています．また，1990 年代の半ばからは，文脈木重み付け (Context Tree Weighting) 法やブロックソート法などの独創的な方法の登場によって， さらに新たな展開が加わるようになっています．

ユニバーサル符号とデータ圧縮小特集（平成 13 年 6 月号）では， Ziv-Lempel 符号，算術符号，文脈木重み付け法，ブロックソート法， 文脈ソート法，Bayes 符号，ミニマックス符号，MDL 基準を発展させた Stochastic Complexity，符号長リグレットによる符号の評価など， ユニバーサルデータ圧縮とそれに密接に関連した分野の最近の理論的・ 実験的研究成果を集め，今後の発展の方向を見極めることを目的とします． データ圧縮に直接関係する成果に加え，新しい応用の開拓など，広い範囲からの 積極的な投稿を期待しております．

1. 対象分野

ユニバーサル符号を中心とするデータ圧縮用符号とその応用に関する分野 (符号化法の提案，性能評価，応用研究など) を対象とする．

- ユニバーサル符号の基礎理論，モデル化の理論など
- ユニバーサルデータ圧縮の新方式
- 符号長リグレットや Stochastic Complexity の評価
- Huffman 符号，算術符号など，データ圧縮用符号の開発，改良，性能評価
- Ziv-Lempel 符号，ブロックソート法，Bayes 符号などの性能評価，冗長度解析
- データ圧縮に関連するアルゴリズム，データ構造，計算量
- 新しい応用に関する成果
- その他関連する理論，技術，周辺分野との融合など

2. 論文投稿締切日 **平成 12 年 9 月 29 日（金）必着**
3. 原稿送付先

〒 105-0011 東京都港区芝公園３－６－２２ ジェーシービル内
(社) 電子情報通信学科出版事業部ソサイエティ誌出版課

4. 問い合わせ先

鎌部 浩
〒 501-1193 岐阜市柳戸１番１ 岐阜大学 工学部 応用情報学科
TEL. 058-293-2752
FAX. 058-230-1895
E-mail: Hiroshi.Kamabe@kmb.info.gifu-u.ac.jp

5. 小特集編集委員会

委員長 横尾英俊 (群馬大)
幹事 植松友彦 (東工大)，鎌部 浩 (岐阜大)
委員 川端 勉 (電通大)，竹内純一 (NEC)，松嶋敏泰 (早大)，
村松 純 (NTT)，森田啓義 (電通大)，山本博資 (東大)

国際会議のお知らせ

以下のご案内する内容につきましては, 変更になっている場合もありますので，ご自身でのご確認をお致します。

INFOCOM2001
日時　2001 年 4 月 22 日 – 4 月 26 日
場所　Anchorage, Alaska
URL　http://www.ieee-infocom.org/2001
原稿　締切終了 (2000 年 7 月 5 日)

ICC2001
日時　2001 年 6 月 11 日 – 6 月 15 日
場所　Helsinki, Finland
URL　http://www.icc2001.com
締切日　2000 年 9 月 1 日

ISIT2001
日時　2001 年 6 月 24 日 – 6 月 29 日
場所　Washington, DC.
URL　http://www.seas.smu.edu/ISIT2001/
締切日　2000 年 10 月 1 日

GLOBECOM2001
日時　2001 年 11 月 25 日 – 11 月 29 日
場所　San Antonio, TX
連絡先　Gayle Weisman, Email: g.weisman@comsoc.org

博士論文要旨の掲載　募集のお知らせ

SITA ニューズレターでは博士論文要旨の寄稿をお待ちしております．昨年１月以降に学位を取得された方について，その博士論文の要旨を掲載致します．該当の方は以下の書式で，編集理事までお送り下さい．

(1) 論文題名（和文論文は和文のみ，英文論文は英文のみ）

(2) 氏名，現在の所属

(3) 電子メールアドレス

(4) 要旨（おおよそ，１／４ページ，４５０字程度以内，大幅に超過した場合には打ち切り掲載となります.）

(5) 文献（最も関係の深い学会発表論文１件）

(6) 学位取得大学，および学位授与年月日

学位取得者本人からの寄稿だけでなく，指導教員からの寄稿も歓迎します．なお，学位取得者と連絡がとれない場合など，要旨の電子化が容易でない場合には要旨を省略いただいても結構です.

会員の声　原稿募集のお知らせ

SITA ニューズレターでは会員のみなさんのご意見、ご要望等を掲載するコーナーを設けることにしました。内容、体裁等につきましては特に制限を設けませんので、ご自由にお書きいただければ幸いです。みなさんの活発なご投稿をお待ちいたします。あて先は編集理事までお願いいたします。

SITA ニューズレターの配布方法について

SITA ニューズレターは前回 34 号より従来の LaTeX ファイルの配布方式から，PDF ファイルによる配布に変更しました。これにより、ニューズレターを会員各位の WWW ブラウザ（インターネットエクスプローラやネットスケープナビゲータなど）で直接閲覧していただけるようになりました。

SITA ニューズレターの閲覧用のホームページの URL（インターネットのアドレス）は，

`http://sita-nl.ics.nitech.ac.jp`

を暫定的に使用します。ここには，第 22 号 以降のニューズレターのバックナンバーも置かれています.

ご都合により従来通りの郵送をご希望される場合には下記の編集理事までご連絡ください。

編 集 後 記

ニューズレター第 35 号をお届けします。前回 34 号からニューズレターのより進んだ電子化の試みが始まり、ニューズレターの形態そのものが大きく変化する可能性も考えられます。まだしばらくは試行錯誤を繰り返すことになろうかと思いますが、より充実した内容を目指し、努力を続けるつもりですので、会員各位のご支援、ご協力をお願い申し上げます。 (笹野)

編 集 担 当 者

笹野 博 (編集理事)
〒 577-8502 東大阪市小若江 3-4-1
近畿大学理工学部電気工学科
Tel. 06-6721-2332 (ext.4301)
Fax. 06-6727-4301
E-mail sasano@ee.kindai.ac.jp

新家 稔央 (編集幹事)
〒 243-0292 神奈川県厚木市下荻野 1030
神奈川工科大学情報ネットワーク工学科
Tel. 0462-91-2331
Fax. 0462-42-6089
E-mail niinomi@ele.kanagawa-it.ac.jp

岡 育生 (編集理事)
〒 558-8585 大阪市住吉区杉本 3-3-138
大阪市立大学工学部情報工学科
Tel. 06-6605-2779
Fax. 06-6690-5382
E-mail oka@info.eng.osaka-cu.ac.jp

山里 敬也 (編集幹事)
〒 464-8603 名古屋市千種区不老町
名古屋大学情報メディア教育センター
Tel. 052-789-2743
Fax. 052-789-3173
E-mail yamazato@nuee.nagoya-u.ac.jp

情報理論とその応用学会事務局
〒 113-8656 東京都文京区本郷 7-3-1
東京大学 工学部 計数工学科
数理第 3 研究室内，山本博資 気付
Tel: 03-5841-6930 (直通), Fax: 03-5841-8605
E-mail: sita-office@hy.t.u-tokyo.ac.jp